

## 浩さんの宝満川カヌー大会

宝満川カヌー大会の事務局員の浩さん（仮名）に、カヌー大会に入める思いをじぶん語っていただきました。

### 「行けー、飛び込めー」、「ドボーン」

私が子どもの頃、高い所から川に飛び込んだり「ムボートで宝満川を下って有明海まで行ったり、みんなでワイワイ楽しんでいました。他にも、無人島でのサバイバル体験など、いろいろなことにチャレンジしていました。

その頃、私たちは「差別と闘つてきた歴史があること」や「差別は命の問題であること」も教わっていました。そこには「どんなことがあっても命を大切にすること」そして、「様々な体験を通して自信をもち、たくましく生きて欲しい」という地域の人々の願いがありました。

当時の宝満川は、私たちにとって遊び場、田畠に水を潤す川、そして、初夏には葦が飛び交う憩いの川でもありました。しかし、時代の流れとともに川の水は輝きを失い、川とふれ合つことも少なくなりました。そのような中、今から30年ほど前、宝満川に関心をもった子どもたちがカヌーを浮かべ、楽しみ始めたのです。

当時の子どもたちは、宝満川の源流を求めて川を上り、湧き出る水の美しさに感動しました。そして、もつときれいな川にしようと川底に落ちていた自転車やバイクなどの粗大ごみを一生懸命に引き上げました。

### 行き来を断つ宝満川

子どもの頃、私と同じく「のっちゃんは、川（宝満川）の向こうに行つたらいかん。」と友だちの親が言つてじるのを聞いたそうです。

このように宝満川は、時には人の行き来を断つために使われることもあります。その宝満川とのふれ合いを通して、多くの人が交流することができる川にしたかったという思いが高まってきました。また、私たちの所にも来て、私たちのことを知つてほしいという願いも湧き出てきました。

こんな思いが重なって、「葦が舞い、魚がいっぱいの宝満川を呼びもどそう～川との共生を求めて～」といふスローガンのもとに開催されているのが、宝満川カヌー大会です。



### インタビューをして

子どもたちには、様々な体験を通して自立して生きていける力を身につければいいですね。そして、いろいろな人権問題に出会った時には、おかしいことはおかしいと言える人になってほしいですね。

市民の方にもお願いがあります。予断や偏見を取り除き、同和問題についてまず正しく知つてほしいですね。それに、私たちの所にも来て、自分で確かめることにしてほしいです。

第一回のカヌー大会の参加者は約百人ぐらいでしたが、回数を重ねるごとに参加者が増えていきました。また、運営に関わるボランティアの方も多くなりました。最近では二千人を越える時もあり、人数制限をするほどの大きな行事となりました。

今では、宝満川が人と人をつなぐ架け橋になってくれていることに、私はとても嬉しくてたまりません。

### 浩さんの思い

カヌー大会のテーマは、最初は「環境」でしたが、今は、「人権」「平和」「命」「交流」が加わりました。私が親として子どもたちや市民の方に願うことがあります。

宝満川の両岸から、そして市内いろいろな所から集まつて賑わっている姿の中に、お互いを認め合って、楽しみ合つている笑顔が見られます。そのような豊かな関係をもつともっと増やしていくことを、市民の一人として私も取り組んでいきたいと思います。

